

メッセージアウトライン ヨハネ19：1~16「十字架につける」

「そこで、ピラトはイエスを捕らえて、むち打ちにした」(1) ピラトはイエスにこのような残酷な仕打ちをすることによって、ユダヤ人たちが満足して、死刑の要求を撤回するのではないかと考えたのだろう。さらにローマの兵士たちはいばらで冠を編み、イエスの頭にかぶらせ、紫色の着物を着せた。(2) 王に見立てて茶化すためである。(3) ピラトはこのようにしてみじめな姿とされたイエスをユダヤ人たちの前に引き出した。「さあ、この人です」(5) しかし、ピラトの意に反してみじめなイエスの姿を見てもユダヤ人たちは憐れみの思いを起すどころか、「十字架につける。十字架につける」(6)と激しく叫びたてたのである。ここに人間の罪の本性があからさまに現れている。これに対してピラトは、「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません」と言った。彼はただちに釈放するとは言わずに、ユダヤ人たちの勢いに押されて、それなら自分たちでせよと責任転嫁をしているのである。

ユダヤ人たちは、律法に照らしてイエスを死刑にする十分な理由があると主張する。(7)→ レビ 24:16参照 しかし、イエスはまことの神の子であられるのでこれは当てはまらない。ピラトはユダヤ人たちのことばを聞いて恐れ(8)、もう一度官邸に入ってイエスに、「あなたはどこの人ですか」(9)と尋ねた。これはイエスが普通の人間なのか、本当に神からの者であるのかを確かめるためであった。しかし、イエスは何も答えられない。そこでピラトは自分にはイエスに対して釈放か十字架かどちらにでもする権威があることを知らないのかと迫る。(10) しかし、イエスはピラトの持つ政治的権力でさえも実は上より、つまり神より与えられているものであるということを教えられる。(11) しかし、そのピラトの罪よりも、もっと大きい罪がある者がいる。それはイエスをピラトに引き渡した者、つまり大祭司カヤパや他のユダヤ人たちであった。

このイエスのことばに触発されたのか、ピラトはイエスを釈放しようとする最後の努力をする。しかしユダヤ人たちは、「もしこの人を釈放するなら、あなたはカイザルの味方ではありません」(12)と迫った。ローマ皇帝への反逆になるというわけである。それについてピラトはイエスに死刑の宣告をする決心を固めて裁判の席に着いた。(13) 「さあ、あなたがたの王です」(14) ピラトは皮肉を込めてこのことばを語ったが、それはユダヤ人たちの感情をさらに逆なですることになった。激怒した彼らは、「除け。除け。十字架につける」(15)と激しく叫んだ。ピラトの「あなた方の王を私が十字架につけるのですか」とのことばに対して、彼らは、「カイザルのほかに、私たちに王はありません」と言った。ここに至って彼らはその信仰までかなぐり捨てた。これこそまさに神に対する冒瀆であり、彼らこそ石で打たなければならない。彼らはイエスを十字架につけようとする目的のために手段を選ばず、神こそイスラエルの真の王であるという先祖伝来の信仰を否定したのである。ここまで聞いて、ついにピラトはイエスを十字架につけるために引き渡した。(16) 彼はその信念を貫徹することがとうとうできなかつた。しかし、それらのことを通して着々と神の救いの計画が成就していくのである。